誰かのために差し伸べた手はいつか自分に返ってくる

落合恵子 作家

おちあい・けいこ／1945年栃木県生まれ。文化放送アナウンサーを経て、小説やエッセイなどの作家活動に入る。1974年に子どもの本の専門店「クレヨンハウス」を開設する。オーガニックレストラン等も主宰。著書に『明るい覚悟 こんな時代に』(2020年　朝日新聞社)、『わたしたち』(2022年　河出書房新社)、他多数。

子どもや女性、高齢者を取り巻くさまざまな問題を社会に発信し、多くの作品を世に送り出してきた落合さん。日々の生活では、庭の土いじりをしたり、本を読んだり、料理をしたりする時間を大切にしている。平和で幸せな暮らしを守るために、わたしたちは何をすべきか――。人と人が自然に、さりげなく手を差し伸べ合うことができる関係づくりが重要であると語る。

戦禍の子どもたちに思いを馳せて

ロシアのウクライナ侵攻から1年以上が過ぎて、遠い昔の第二次世界戦争と、どこかで重なるようなおそろしさを感じています。あの時代、ヘルマン・ゲーリングというヒトラーの腹心と呼ばれた人が次のようなことを言っています。「みんな戦争は嫌いだ、だが戦争をするのはとてもたやすい。『敵が攻めてくる』と言えばいい。同時に、平和主義者には『愛国心のない人間だ』って言えばいい」と。こうした戦争への仕向けられ方を見抜かなければなりません。

落合さんが主宰する子どもの本の専門店「クレヨンハウス」。1階にはオーガニックの野菜市場やレストランもあり、家族連れでにぎわう（住所／東京都武蔵野市吉祥寺本町2-15-6）

クレヨンハウスは子どもたちが座り読みできることが特徴の一つ。平和をテーマにした絵本のコーナーがあり、反戦を伝えている

当然ながら戦争は、あってはならない。ただ、そこで私たちが考えなきゃいけないのは、戦争をなくすために自分自身はいったい何ができるか。この国にいてたとえ戦火が遠く感じる時でも、その問いかけはとても重要なことです。

ここクレヨンハウス（写真参照）の2階には、平和や反原発について考える本のコーナーがあります。ある時、本を読んでいた子どもが「ウクライナの子は今、本が読めないんだよね」って、しみじみ言っていました。たしかに、平和でなかったらゆっくり本を読むこともできないし、お腹いっぱい食べることもできない。子どもたちがそう身にしみて感じているのであれば、その思いを大事にしなくてはいけない。もし平和でなくなったらどうなるか、想像力を働かせて考えることが、とても重要なことだと思うのです。

絵本の持つ“やわらかな世界”を味わう

ウクライナの民話を基にした絵本で『てぶくろ』という物語があります。雪が降り積もる寒い日に、犬を連れて散歩に出たおじいさんが手袋の一方を落とす。手袋だから、中はあったかい。それを見つけたリスやウサギが次々と手袋の中に入っていく。しまいには大きな大きなクマも来て、入りそうもなくて困惑してしまう。それでも先に入った動物たちが「どうぞ」と隙間を作って入れてあげる。

誰かが必要としていることを、自分ができることで手を差し伸べる。ほんの少しだけでも、ほかの誰かに手を差し伸べられるという瞬間は、人にとって幸せなこと。同時に、誰かに差し伸べた手は自分が困ったとき、どこかから差し伸べられる手だと考えることも可能です。実際に返ってくるか来ないかは別として。ためらうことはないと思います。

さまざまなテーマはありますが、絵本の底流には、温かくて“やわらかな世界”が広がっている。生きることへの肯定感や、自分の人生をかけがえのないものと

して受け入れる感受性も。この新鮮でやわらかな世界を、味わってもらえたらいいなって思います、子どもはもとより大人もまた。

小さいときに絵本や本に接することができた子どもは、大人になっても何かのときに思い出して勇気づけられることがある。また、自分が子育てをする時、介護で追い詰められた時など、「ちょっとここに来て、休んでいったら？」という呼びかけを本は贈ってくれます。ささやかな読書がもたらす力は、わたしたちが想像する以上に大きいと思います。

約３年のコロナ禍によって、多くの人がストレスを感じて暮らしてきました。そうしたなかでも１日のうちの10分でもいいし、１週間のうちの１時間でもいいし、日常の暮らしの中で、「これ」と向き合っているときの私は「もっとも優しくてすてきな私」と思えるものを見つけるといいでしょう。私は土いじりが好きだし、祖母からも母からも植物を世話すること、反対に植物からの恵みを受けることを教わっていて、土を握りしめた瞬間、頭の凝りがすーっと抜けていくような気持ちになれます。

好きなことは、人によってさまざまだと思いますが、大好きなことをしている時間と、その時間の中にいる幸せな自分を見つけていただきたいと思いますね。

ていねいな暮らしの中に、心豊かに生きるヒントがある

一人ひとりの違いを強みにする組織に

私にとって差別は、自分はもちろん誰かがされるのもこの上なく不快です。自分の過去を手繰り寄せていくと、私自身が差別される側の子どもだったということが、その理由のひとつになっているかもしれません。差別が介在してしまうと、つながるはずだった人と人の関係を破壊する場合もあることを、子ども時代から実感していましたから。

差別をなくすには、人は一人ひとりが違うんだということを学ぶこと。そして体感すること。違いは、人と人とを隔てる溝ではなくて、むしろ、出会って学び合う時空であることを、わたしたちは真摯に学びたいと思います。

協同組合は、人と人のつながりの組織ともいえますが、ＪＡが地域コミュニティーの一員としてさらに存在感を示すには、できるかぎり外に開かれた組織であることが重要です。仲間うちだけで一つにまとまることは、容易だけれども、外に向かって開かれていないと広がりが持てない、賛同者を増やすこともできない。

そして、女性の声をもっと取り込んでいくこと、生活の中から生まれた声から学び、生かすことではないでしょうか。これまで男性は生活の中に居ながら、生活者ではなかった。いまわたしたちに問われているのは、誰もが生活者であること、生活者になることではないでしょうか。可能なかぎりオープンで開かれた集団は、かならず明日につながると思います。

クレヨンハウスは昨年12月に東京・吉祥寺に移転。今後は現在の社会のありようについていけない人、はみ出さざるを得ない人、模索している人たちとオーガニック野菜の生産を通して、人間関係の再構築を目指す活動にもチャレンジしたいと話す